

しんぱん しどうようもんしゅう
新版 指導要文集

だいよんしょう ぶつぽう しゃかい
第四章 仏法と社会

りっしょうあんこく
立正安国

びかん かたむ

きようもん ひら

よみな

つらつら微管を傾け、いささか経文を披きたるに、世皆

しよう そむ ひと

あく き ゆえ ぜんじん くに す

正に背き、人ことごとく悪に帰す。故に、善神は国を捨

あいさ しようにん ところ じ かえ

てて相去り、聖人は所を辞して還りたまわず。ここをも

まきた ききた さいお なんお

って、魔来り、鬼来り、災起こり、難起こる。言わずんば

おそ

あるべからず、恐れずんばあるべからず。

りっしょうあんこくろん

(002 立正安国論

りっしょうあんこく

立正安国 25ページー7行)

けんしき すこ きようもん ひら

わずかな見識をかたむけ、少しばかり経文を開いてみるのに、

よ なか じようげばんみん しようほう そむ ひと みなあくほう きえ

世の中は上下万民すべて正法に背き、人びとは皆悪法に帰依し

しゅご

しよてんぜんじん

くに

す

さ

ています。そのため、守護するべき諸天善神は国を捨てて去ってし

しょうにん ところ

じ

ほか

ところ

い

かえ

まい、聖人は所を辞して他の所へ行つたまま帰つてきません。

しよてんぜんじん

しょうにん

まじん

きじん

きた

わざわ

そこで諸天善神や聖人にかわつて、魔神、鬼神が来つて災いが

お

なん

お

こえ

だい

起こり、難が起こるのです。じつにこのことは、声を大にしていわな

おそ

ければならないことであり、恐れなくてはならないことなのです。

われ いまごげん あき さんぜ み いっさい こくおう みな
「我、今五眼もて明らかに三世を見るに、一切の国王は皆

かこ よ ごひやく ほとけ つか ていおうしゅ

過去の世に五百の仏に侍うるによつて帝王主となること

え いっさい しょうにん らかん

を得たり。ここをもつて、一切の聖人・羅漢、しかもた

か こくど なか らいしょう だいりやく な

めに彼の国土の中に来生して大利益を作さん。もし王の

ふくつ とき いっさい しょうにん みな す さ

福尽きん時は、一切の聖人、皆、ために捨て去らん。も

いっさい しょうにん さ とき しちなんかなら お

し一切の聖人去らん時は、七難必ず起こらん」

りっしょうあんこくろん

(002 立正安国論

りっしょうあんこく

立正安国 27ページー4行)

しかず、彼の万祈を修せんよりは、この一凶を禁ぜんに
は。

（002 立正安国論

りっしょうあんこくろん

りっしょうあんこく

立正安国 33 ページ 13 行）

さいなん こんぜつ

せんまん いの

いつきよう

災難を根絶するためには、千万の祈りをするよりも、まず一凶

ほうねん ほうぼう きん

である法然の謗法を禁じなければならぬのです。

なんじ

汝、すべからく一身の安堵を思わば、まず四表の静謐を

いっしん

あんど

おも

しひよう

せいひつ

いの

禱るべきものか。

りっしょうあんこくろん

002 立正安国論

りっしょうあんこく

立正安国 44ページー4行

じぶんじしん

こうふく

ねが

いっこく

せいおん

へいわ

あなたが自分自身の幸福を願うならば、まず一国の静穏、平和を

いの

祈るべきです。

なんじ はや しんこう すんしん あらた すみ じつじよう いちぜん

汝、早く信仰の寸心を改めて、速やかに実乗の一善に

き すなわ さんがい みなぶつこく ぶつこく おとろ

帰せよ。しからば則ち、三界は皆仏国なり。仏国それ衰

じつぽう

ほうど

ほうどなん

やぶ

えんや。十方はことごとく宝土なり。宝土何ぞ壊れんや。

りつしょうあんこくろん

(002 立正安国論

りつしょうあんこく

立正安国45ページ7行)

いっこく

はや

じゃほうしんこう

こころ

あらた

じつじよう

いちぜん

あなたは一刻も早く邪法信仰の心を改めて、実乗の一善で

にちれん

ほうもん

きえ

ばんにん

みようほう

ある日蓮の法門に帰依しなさい。そのような万人が妙法をたもつ

せかい

ぶつこく

ぶつぽう

こんてい

しゃかい

ていけば、この世界はすべて仏国です。仏法を根底とした社会であ

おとろ

じつぽう

しゃば

るならば、どうして衰えることがありましようか。この十方の娑婆

せかい

じやつこう

ほうど

ほとけ

す

ひか

かがや

とち

世界はことごとく寂光の宝土（仏の住む光り輝く土地）です。
ほうど

宝土であるならば、どうしてこわれることがありましようか。

にほんこく
日本国にしてこの法門を立てんは大事なるべし
ほうもん
た
だいじ

009
せんじしやう
撰時抄

りっしやうあんこく
立正安国
211
ページー
14
行

かくのごとく仏法の邪正乱れしかば、王法も漸く尽き
ぶつぽう じゃしやうみだ おうほう ようや っ
ぬ。結句は、この国、他国にやぶられて亡国となるべきな
けっく くに たこく 破 ぼうこく
り。

014 本尊問答抄
ほんぞんもんどうしやう

立正安国
りっしやうあんこく
311 ページ 10 行

とき

便

え

てんまはじゅんみだ

い

こくどつね

かからん時は、たよりを得て天魔波旬乱れ入り、国土常に

けかち

てんか

えきれい

たこくしんぴつなん

じかいほんぎやくなん

飢渴して、天下も疫癘し、他国侵逼難・自界叛逆難とて、

わくに

いくさ

かつせんつね

あ

のち

たこく

つわもの

我が国に軍・合戦常に有つて、後には他国より兵ども

襲

きた

くに

せ

み

おそい来つてこの国を責むべしと見えたり。かくのごとき

とうじようけんご

とき

よきよう

びやくほう

しるいう

ほけきよう

鬪諍堅固の時は、余経の白法は驗失せて、法華経の

だいろうやく

だいなん

じ

み

大良薬をもつてこの大難をば治すべしと見えたり。

ほつけしよしんじようぶつしよう

(048 法華初心成仏抄

りっしょうあんこく

ほけきよう

こくど

いの

かみいちにん

しもばんみん

いた

法華經をもつて国土を祈らば、上一人より下万民に至るま

よろこ

さか

たも

ちんごこつか

だいびやくほう

で、ことごとく悦び栄え給うべき鎮護国家の大白法な

り。

(048 法華初心成仏抄

ほつけしよしんじようぶつしよう

りつしyouあんこく

立正安国 694 ページ 7 行)

てんくず
天崩れば我が身も崩るべし。
ちすいかふうめつぼう
地裂けば我が身も裂くべし。
めつぼう
地水火風滅亡せば我が身もまた滅亡すべし。

049 三世諸仏總勘文教相廃立（總勘文抄）

さんぜしよぶつそうかんもんきようそうはいりゆう

そうかんもんしよう

りっしょうあんこく

立正安国 720 ページ 1 行

かんしんこく

あ

すなわ

くにただ

そうしいえ

あ

すなわ

諫臣国に在れば則ちその国正しく、争子家に在れば則ち

いえなお

こっか

あんき

せいどう

ちよくひ

あ

ぶつぼう

その家直し。国家の安危は政道の直否に在り、仏法の

じゃしよう

きようもん

みようきよう

よ

邪正は経文の明鏡に依る。

ほうじようときむね

ごじよう

064 北条時宗への御状

りっしようあんこく

立正安国 854 ページ 10 行

しょうほう てんかいちどう しんこう

くにあんのん

正法を天下一同に信仰せば、この国安穩ならん。され

げんぎ い

ほう

すなわ てんかたいへい

ば、玄義に云わく「もしこの法によらば、則ち天下泰平

ほう

ほけきよう

ほけきよう しんこう

ならん」。「この法」とは、法華經なり。法華經を信仰せ

てんかあんぜん

うたが

ば、天下安全たらんこと疑いあるべからざるなり

おんぎくでん

095 御義口伝

りっしょうあんこく

立正安国

1093

ページー13行

にちれん い ぶんおうがんねんたいさいかのえさる かんが

日蓮が去ぬる文応元年太歳庚申に勘えたりし

りっしょうあんこくろん いま 違 ふごう しよ

立正安国論、今すこしもたがわず符合しぬ。この書は

はくらくてん がふ こ ほとけ みらいき 劣 まっだい

白樂天が樂府にも越え、仏の未来記にもおとらず。末代

ふしぎ 過

の不思議、なに事かこれにすぎん。

(107 種々御振舞御書

しゅじゅおんふるまいごしよ

りっしょうあんこく

立正安国 1225 ページー6 行)

にちれん さ ぶんおうがんねん たいさいかのえさる ばくふ

日蓮が去る文応元年（太歳庚申）にかんがえあらわして幕府に

ていしゅつ りっしょうあんこくろん よげん すこ たが

提出した立正安国論の予言は少しも違わずにあたりました。こ

りっしょうあんこくろん ちゅうごく はくらくてん とうじ せいじ ふうし くに

の立正安国論は、あの中国の白樂天が当時の政治を風刺して国

いさ がふ すぐ しやくそん みらい よげん きようもん おと

を諫めた楽府よりも勝れ、釈尊の未来を予言した経文にも劣るも

まつぼう よ いじよう ふしぎ

のではありません。末法の世にこれ以上の不思議がまたとありまし

ようか。

こくど

驗

やま 崩

されば、国土やぶれんとするしには、まず山くずれ、

そうもく 枯

こうが 尽

徴

ひと

まなこ

みみとうきよう

騒

草木かれ、江河つくるしるしあり。人の眼・耳等驚そう

てんぺん

ひと

こころ

動

ちどう

すれば天変あり、人の心をうごかせば地動ず。

ずいそうごしよ

(202 瑞相御書

りっしょうあんこく

立正安国 1550 ページ 17 行)

だいち どう

ひと ろっこん うご

ひと ろっこん うご

大地の動ずることは人の六根の動くによる。人の六根の動

だいしよう

だいち ろくしゅ こうげ

にぜん きようぎよう

きの大小によつて大地の六種も高下あり。爾前の経々

いつさいしゅじよう

ぼんのう

破

まこと

には、一切衆生、煩惱をやぶるようなれども、実にはや

いま

ほけきよう

がんぼん

むみよう

だいどう

ぶらず。今、法華経は、元品の無明をやぶるゆえに大動あ

まつだい

ざいせ

あくにん た た

り。末代はまた在世よりも悪人多々なり。かるがゆえに、

ざいせ ずい

勝

由

じげん

たも

在世の瑞にもすぐれてあるべきよしを示現し給う。

ずいそうごしよ

(202 瑞相御書

りっしょうあんこく

立正安国 1552 ページ10行)

だいち しんどう

にんげん

ろっこん

うご

お

ひと

大地の震動は人間の六根が動くことによつて起こるのです。人の

ろっこん うご

だいしよう

だいち

しんどう

ろくしゅ

こうてい

六根の動きの大小によつて大地の震動にも六種の高低がありま

にぜん しよきよう

ひと

ろっこん

ぼんのう

やぶ

す。爾前の諸経はあらゆる人びとの六根の煩惱を破つていよう

じっさい

やぶ

ほけきよう

ぼんのう

ですが、実際は、破つてはいないのです。いま、法華経は、煩惱の

こんぽん

がんぽん

むみよう

やぶ

だいしんどう

お

もつとも根本である元品の無明を破るゆえに大震動が起こるので

まつぼう

しやくそん

ざいせ

あくにん

おお

むみよう

す。しかも、末法は、釈尊の在世よりも悪人が多く、その無明を

やぶ

まつぼう

ずいそう

しやくそんざいせ

ずいそう

おお

破るのですから、末法の瑞相は、釈尊在世の瑞相よりも大きいと

ほとけ しめ

いうことを仏は示されているのです。